

生み出してゆくことです。この意味でも、名大祭が、全学的にもてたことを心から喜びかつ誇りに思っています。

さきの引用部分とあわせ読むことによつて、東山キャンパスへの集結という地理的条件に加えて、当時の社会的背景を契機に高揚した「学生運動」のエネルギーを全学的に結集するという面で、名大祭の開催そのものが学生にとっては一つの象徴的な行事であつたといえるのではないでしようか。

三、時代を映す名大祭①—一九六〇年代

◆第一回〜第一〇回のテーマ

名大祭では、その年ごとにテーマが設定されています。たとえば、第一回名大祭のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて—日本人民の歴史づくりのために—」で

した。また、第二回のテーマは、「日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて―変革の時代における学生の立場と役割―」というものでした。

これら第一回・第二回では、メインテーマは同じですが、サブテーマが異なっています。こうしたテーマの設定は、「昨年からとびはなれた今年五月というのではなく、この一年間にひきつがれてきた学問、文化面の創造的活動の一拠点として、第一回に連結した第二回」という考えによるものでした（『第二回名大祭パンフレット』）。

名大祭一覧（1）として、第一回から第一〇回までの名大祭のテーマなどを示しておきます。この時期のテーマでは、「人民」「祖国」「民族」「連帯」「真理の砦」など今日ではあまり聞き慣れないことばが繰り返し使われています。これら一九六〇年代のテーマをみて、当時の名大祭に対して読者の皆さんはどのような印象をもつのでしょうか。以下、本節では、一九六〇年代の名大祭テーマの背景や特徴について触れておきたいと思います。

◆時代背景―一九六〇年代

前章において、名大祭誕生の時代背景として、二つのことを紹介しました。一つは、六〇年安保条約の改定をめぐる全国的な社会状況です。もう一つは、伊勢湾台風による被害とその救済活動という東海地方固有の社会状況です。

名大祭一覧（1）

回	開催年（日程）	テ ー マ	
		メ イ ン	サ ブ
1	1960年 （6/2—6）	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	日本人民の歴史づくりのために
2	1961年 （5/21, 5/26—28）	日本人民のエネルギーの継承と発展の方向を求めて	変革の時代における学生の立場と役割
3	1962年 （5/13, 5/27, 5/30—6/3）	戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう	新しい名古屋大学づくりのために
4	1963年 （5/30—6/2）	祖国に平和を 大学に民主主義を なくささとせちがらさをつけて 人民の輪の中に私たちの未来を築こう	私たちの新しい生き方を見いだすために
5	1964年 （5/26—31）	胎動から躍動へ 祖国の痛みがさらにはげしくうづく今 ぼくらの連帯は巨歩を進める、さらにもう一歩前へ	民主的学問、民族性豊かな文化を創造する中で
6	1965年 （5/9, 5/16, 5/25—30）	大学に新しいいぶきを ゆれ動く世界の中で 岐路に立つ我ら 逆流に抗して人民の輪を広げよう	生活に根ざした文化、平和のための学問を追求する中で
7	1966年 （5/22, 5/29, 6/7—12）	築こう平和と真理のとりでを 嵐の中のアジア・祖国日本 深まりゆく大学の危機について 僕ら連帯の輪をさらに広げよう	大学が真に民族の課題に応えるために
8	1967年 （5/14, 5/21, 6/6—11）	はばたけ創造のつばさ 反動の嵐の中 たちあがる人民と呼びかわし 学問・文化に力強い生命を	祖国の平和と豊かな学園生活をめざして
9	1968年 （6/4—9）	この祖国に平和と民主主義を 我ら真理のとりでを築くもの たぎる力をよりあわせ 歴史をになう人民の隊列へ	学問・思想の自由を守り、「明治百年祭」を批判するなかで
10	1969年 （6/4—8）	磨け 祖国切り拓く 科学の メスを 我ら真理の砦きずくもの 従属の鎖たちぎる 統一の力今こそかたく	自主的活動を追求し、大学民主化を推進するなかで

（各年『名大祭パンフレット』より作成）

では、その後の一九六〇年代の社会情勢はどのようなものだったのでしょうか。ちょうど第一一回名大祭パンフレットには、過去一〇回の名大祭を振り返った「名大祭の歩み」というコラムが掲載されています。少し長くなりますが、次に引用しておきます（カッコ内は引用者補注）。

六〇年安保闘争以後、学生運動の中に分裂と混乱が持ち込まれ、(第二回)名大祭も困難な状況に直面してゆきます。……(略)……学生運動分裂のあたりで、(第三回)名大祭は一時建設的、実践的な方向を見失いかけてましたが、新しい学生運動の芽は下からの盛り上がりとして、積極的に示されました。……(略)……(第四回名大祭では)全学フェスティバル、民族の心を呼ぶもの、など……(略)……創意性あふれる名大祭企画、活動がくりひろげられました。学生運動の統一と団結がすすめられ、「自治会はみんなのものみんなの利益を守るもの」という方向がはつきりとしてきました。第五回名大祭は……(略)……第四回名大祭の新しい芽を伸し、「若者のつどい」「日朝友好のつどい」など学外他階層との連帯を一層強化する取り組みがふえました。……(略)……第六回名大祭ではアメリカの北爆が開始され、日「韓」条約が結ばれようとし、第七回では、全学ぐるみで日「韓」条約反対を叫びました。……(略)……第八回では……(略)……名大づくりが焦

点になり、第九回名大祭は大学問題が国民的問題となる中で、市民との連帯、日常の学間研究活動の現状調査が強調されました。……(略)……(第一〇回名大祭では)大学ぐるみで「大学法」(「大学の運営に関する臨時措置法案」)に反対してゆく中で、大学の民主化、学間研究活動の発展めざしてとりくまれました。

右の引用文で述べられている「全学フェスティバル」「民族の心を呼ぶもの」「若者のつどい」などは、この時期の名大祭の特徴を示す企画であるといえます。これらを中心に、一九六〇年代の名大祭のおもな企画を簡単に説明しておきたいと思います。

◆中心企画としてのテーマ関連講演会

この時期の名大祭において、テーマ関連の講演会をはじめとするテーマ関連の企画は、全学企画としてきわめて重要な位置づけを与えられていました。ここでは、第三回名大祭を例にして紹介しておきます。

第三回名大祭は、本祭の期間として四日間が設けられていました。そして、この日程のなかでテーマ関連企画は、最終日を除く三日間の午前中に必ず実施されています。すなわち、初日の午前一〇時から午後一時まではテーマ講演会Ⅰとして「現代における学問の課題と大学の役

割」(上原専祿二橋大学名誉教授)と「戦後における大学の形成と学生の諸問題」(井上清京都大学教授)の二講演、二日目の午前一〇時から正午まではテーマ講演会Ⅱとして「新しい名古屋大学の展望と我々の果すべき役割」(新村猛名古屋大学文学部長)の一講演、三日目の午前九時半から午後二時半までは全学シンポジウム「戦後史を足がかりに現代における大学の役割と学生の生き方を求めよう―新しい名古屋大学づくりのために―」がそれぞれ行なわれています。

しかも、これらの全学企画が行なわれている時間帯には他の企画が行なわれておらず、文字どおり、すべての学生が参加できる企画としての形態をとっていることがわかります。

◆全学シンポジウム

これは、第一回名大祭から行なわれている全学企画で、原則として、テーマ講演会と密接に関連づけられて企画されています。たとえば、第四回のシンポジウムでは、事前に行なわれた学部別シンポジウム内容についての各学部報告者によるレポート、それに対する助言者の発言、さらに名大祭テーマ講演内容を軸としながら、学生が当面する諸問題や大学の役割などについて具体的な討論が行なわれたようです。

そうした点からも、当時、この企画は「名大祭の最初から全国にも珍しい積極的な、大衆的



第7回名大祭 若者の集い（第7回パンフレットより）

な思想運動として作りあげられ、『統一テーマを深める』ということを直接的に行なう、名大祭の軸、名大祭の魂ともいべきもの」と位置づけられていました（『第四回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学シンポジウムは、第二回名大祭以降は実施されなくなっています。

◆全学フェスティバル

これは、「名大祭のテーマを中心にすえた、みんなの『やる名大祭』の企画」として、第四回名大祭から新たに設けられた全学的な企画です。『やる名大祭』とはいわゆる参加型の名大祭のことを意味しており、この全学フェスティバルでは、他大学の学生や市民の参加を得ながら、演劇・合唱・演奏・踊り・スライドなどあ

らゆる手法を駆使して「バカデカクテ愉快な」総合芸術の創造が追求されました。

この全学フェスティバルは、名大祭の最終日に豊田講堂で開催されるのが通例でした。たとえば、第七回名大祭の際には、二時間にもおよぶシナリオを全員で創作し、八〇〇名以上の出演者による合同演奏・合唱を行なってフィナーレを飾ったとされています（『第八回名大祭パンフレット』）。

なお、この全学フェスティバルは、第一九回名大祭（一九七八年）まで毎年開催されていました。

◆民族の心と呼ぶもの

全学フェスティバルと同じく、第四回名大祭から始められた企画です。この「民族の心と呼ぶもの」は、民謡・落語・漫才などの日本の民俗芸能・大衆芸能に触れる機会を提供するものでした。この企画の背景には、「おしきせのアメリカ文化、植民地的文化でなく、日本には日本独自に発展した素晴らしい文化」があり、それら文化は『人民のいぶき』が感じられ私たちを真に心の底から感動させ、誇りを持たせる」ものであるという考えがあります（『第五回名大祭パンフレット』）。

なお、この「民族の心と呼ぶもの」は、第八回名大祭までは独立した企画として開催されて

いましたが、第九回名大祭の際に全学フェスティバルに吸収されています。

◆若者の集い

第五回名大祭から登場した「若者の集い」は、働く人（勤労青年）と学問する人（大学生）との交流の場を提供する企画として始められ、第一〇回名大祭まで開催されていました。この企画の初回のパンフレットには、次のような開催趣旨が掲載されています（『第五回名大祭パンフレット』）。

人間の生活で最も神聖であるべき労働に関し、現状は、労働者を金に換算出来る商品として人命を軽視し、自由化に対する措置と称して、合理化の名目で多数の労働者の首をわずかの金で首を切り、大会社同士は合併し、大財閥の出現、その反面中小企業の倒産、物価の上昇など、若者の疑問と不満は大きい。それに一方、学生には……（略）……学生の正当な権利と自治が制限され侵されている現状を真剣に話し合う必要があると思います。働く人と学問する人との間にある人間らしく生きる権利に関し今迄、相方があまりに両方が無関心だった事を改め、……（略）………本当の労働の意義、学問の意義を追求する中で、皆な若者は友達であり仲間である事を再認識し、すばらしい若者の若さで僕達の世界を作ろうではありませんか。

◆一九六〇年代の名大祭

この時期の名大祭テーマは、学生運動との深い結びつきを基本に、国内外の情勢も視野に入れたさまざまな政治・社会問題に敏感に反応したものであったということが出来ます。当時の学生は、名大祭を学生のさまざまな要求実現の場であるとともに、学外の一般市民との交流・連帯の場であると位置づけていたのです。その意味において、名大祭は一定の緊張感をともなう場であったともいえるでしょう。

時期的には少しずれがありますが、一九七一年に開催された第一二回名大祭パンフレットにおいて、芦田淳学長は、「名大祭は読んで字が示すように、『おまつり』であります。人間は緊張の連続で生きられるものではありません。楽しみも織りこんだものであってほしいと思います。」とのメッセージを寄せています。このメッセージの背景には、一九六〇年代の名大祭が緊張感をともなう場としての性格を強くもっていたことをうかがわせます。